

## 『汗』(内田吐夢、1929) エッセイ

近年、日本において徴農制について議論がされることがある。徴農制とは、徴兵制のように国民を徴用し、農業に従事させる制度のことである。現在の文脈では、若者の問題と農業問題において議論がなされている。ニートや若年失業者、非正規雇用者といった若者の問題では、力のありあまっている若者を農家に安価な労働力として提供することによって職を与えることが主張される。農家における後継者不足、高齢化、低い食料自給率、食育といった農業問題では、実際に自然の中で農作物を生産することの喜びを体験させて、若者に農業を志すきっかけを与えることが主張される。このように徴農制は、若者の問題と農業問題を関連づけて、その両者を一気に解決させるものとして近年出てきた議論である。

こうした徴農制の議論には「近頃の若者の性根を肉体労働によって叩きなおす」といった若者バッシングが含まれていることがある。甘やかされて育ってきた若者に肉体労働をさせることで、「まともな」人間に生まれ変わらせようというのである。この主張は、肉体労働を経験することによって、健全な精神を身につけることができるという、労働に価値を見出す考えに基づいている。内田吐夢の映画作品、『汗』はブルジョワである主人公北山平左エ門が、ちょっとした手違いからプロレタリアとして肉体労働を経験する物語である。体を動かすことなく裕福な生活を送っていた平左エ門は、肉体労働を強いられた当初、それを嫌がるが、徐々に労働の喜びを覚えるようになっていく。平左エ門は肉体労働の経験を経た映画のラストにおいて、健全な精神を身に付けることが出来たといえるのであろうか。

『汗』の前半において描かれているブルジョワとして生活には、感情的なものは見られず、没個的である。平左エ門は豪華な屋敷にはたくさんの使用人を従え、贅沢な暮らしをしている。そうした生活においては、平左エ門の意志によって仕事が行われることはなく、機械的に流れていくだけである。何事にも家の規則に縛られていて、平左エ門の意思が尊重されることは無い。このことは、平左エ門の周りに控えている使用人たちをみても分かる。使用人たちはロングショットで撮られていることが多いため、個々の人物の顔を識別することは出来ない。家老の源兵衛は平左エ門の取り巻きとして、唯一1ショット内に一人で撮られ、ミディアム・クローズアップによって顔の識別が出来る人物である。しかし、その源兵衛が、行方不明になった平左エ門の捜索を依頼するシーンでは、ハイ・アングルのショットで撮られ、他の使用人たちをまったく同じ「頭」として撮られていることは注目し値するだろう。また、使用人たちは平左エ門に合わせてしかアクションを起こさないため、みな同じように静止している、あるいは、平左エ門の後を大人数で付いていくなど、一人一人の動きは常に同じである。使用人たちの個性はまったく見られない。このようにブルジョワの生活では、個人の感情は問題ではなく、機械的に流れていく様子が描かれる。

その一方で、プロレタリアの生活は、感情的な人間関係と、個人の快樂が描かれる。山の別荘から駆け下りるシーンから、平左エ門のブルジョワからプロレタリアへの転落が始まる。道端で寝ている間に服やお金を盗まれた平左エ門は、肉体労働をせざるを得ない状況へと追い込まれてしまう。初めは嫌々だった平左エ門は肉体労働で体を動かし、汗をかくことによって、ご飯がお

いしくなることを知る。同僚のチョロ竹たちとお酒を飲む呑み屋のシーンでは、平左エ門が別荘で飲んでたお酒のシーンとは違い、非常に楽しそうである。別荘のシーンでは、一人でお酒を飲み、その量は制限され、退屈な芸を見せられた。呑み屋のシーンでは、仲間たちみんなで楽しくお酒を飲み、平左エ門とチョロ竹は仲良く眠ってしまう程のお酒を飲んでしまう。ブルジョワの生活ではなかった平左エ門の快樂と感情的な人間関係がみられるのだ。チョロ竹以外の労働者たちであっても、彼らは常に動いており、個々の労働における動きはばらばらである。仕事の後、帰るときもみなばらばらに散っていく。屋敷の使用人たちのように、動きが揃うことは無いのだ。プロレタリアの生活はブルジョワの生活と比べて人間的に描かれていると言えるだろう。

プロレタリアの生活からブルジョワの生活へと戻った平左エ門には変化が見られる。肉体労働の現場から屋敷に戻った平左エ門は、肉体労働の経験から、真面目に仕事を行うようになる。労働現場において親方たちのピンハネを知ったため、北山家においてピンハネが行われていないか丁寧にチェックする。プロレタリアの貧しい生活を経験したため、記念館の開館式典において現場の労働者たちにお金を配る。また、汗をかいて働くことの喜びを覚えた平左エ門は屋敷においても、肉体労働を行う。このように平左エ門はプロレタリアの生活を経験したことによって、それまでの自分の生活を新ためて、真面目に働くようになった。

一見、平左エ門は肉体労働を経験したことによって、健全な精神を身に付けたように見えるが、素直にそうとは言えない。映画のラストシーンにおいて、屋敷で肉体労働をする平左エ門は相変わらず多くの使用人たちを従えている。平左エ門を眺めている使用人たちは映画の前半と同じく没個的である。さらに肉体労働をしている平左エ門は根本的にプロレタリアとは異なっている。平左エ門の労働の目的は、汗をかいておいしいご飯を食べるためであり、何も生産することはない。プロレタリアが生産を担い、ブルジョワがそれを搾取するという構造は何も変わっていない。このラストシーンにおいて平左エ門は、ブルジョワの生活に静という感情的な(恋愛的な)人間関係と、おいしいご飯という快樂を加え、幸せなラストをむかえる。しかしそのことによって、ブルジョワとプロレタリアの上下関係そのものを問う機会が失われてしまった。

このことは、ラストシーンだけではなく、親方が受けた罰においてもみることができる。平左エ門がまだ肉体労働をしているときに、親方による賃金のピンハネを知り、驚愕する。親方の上にいる存在がさらにピンハネをしていることがチョロ竹の説明によって暗示されているが、平左エ門による怒りの矛先が向かうのはプロレタリアである親方である。親方はブルジョワに戻った平左エ門にお金をもらえない上に、静まで取られてしまい散々である。ピンハネをしていたため仕方のないことと言えるかもしれないが、親方はあくまでプロレタリアなのだ。ここでも、ブルジョワとプロレタリアの上下関係が問われることはない。ブルジョワはまったく断罪されない。相変わらずプロレタリアはブルジョワに搾取され続けるのだ。平左エ門が肉体労働によって身に付けた健全な精神とは、ブルジョワにとって都合のいい「健全」な精神でしかないのではないだろうか。